

# 紀尾井だより

3/4

March / April  
2025

Vol.170

インタビュー

萩森英明 (作・編曲家)

紀尾井ホール室内管弦楽団  
第142回定期演奏会

連載

徳丸吉彦 山口智子 対談  
邦楽をたのしもう! (第5回)

[クラシック音楽のテーマに基づく3話]  
アルバン・ベルクをめぐる3つの話

# 萩森英明さんに聞く

「一般の人にわかる1本の旋律は私の作曲語法でもあります」

2025年4月にオープン30周年を迎え、名称を「日本製鉄紀尾井ホール」と改めるのを機に、西洋クラシック音楽と日本の伝統音楽の2部門が連携して「響き合う和と洋」と名付けた新しいシリーズを立ち上げます。5月8日には紀尾井ホール室内管弦楽団(阪哲朗指揮)と和楽器奏者の開館以来初のコラボレーション、「近現代ニッポン音楽の歩みを聴く」を開催します。中尾都山(1876-1956)や宮城道雄(1894-1956)から廣瀬量平(1930-2008)にいたる現代邦楽の歴史をたどる中、町田嘉章(佳聲=1888-1981)が1927年(昭和2年)に作曲した「三味線協奏曲第1番」の復元初演には、とりわけ大きな注目が集まっています。

1945年3月10日の東京大空襲でオリジナルの楽譜は焼失したとされ、SP盤音源から採譜、オーケストレーションを復元する困難な作業は作曲&編曲家として多方面で活躍する萩森英明さん(1981年生まれ)に委ねられました。2025年1月10日、大谷康子さん(ヴァイオリン)が自身のデビュー50周年記念コンサートのため萩森さんに委嘱した新作ヴァイオリン協奏曲『未来への讃歌』の世界初演(サントリーホール、山田和樹指揮)当日、紀尾井ホール内で萩森さんに話をお聞きました。



© 堀田力丸

はぎのもりひであき

萩森英明(作・編曲家、ピアニスト)

東京芸術大学卒業。作品は群馬響、東京響、新日本フィル、東京シティ・フィル、セントラル愛知響、京都フィル、琉球響、等により演奏されている。編曲家としての活動も多く、主要なオーケストラのために数百曲のスコアを書くほか、「題名のない音楽会」「紅白歌合戦」等のTV番組の編曲など、活動は多岐にわたる。

——萩森さんが町田さんの「三味線協奏曲第1番」の復元を手がけるにいたった背景は、どのようなものだったのでしょうか？

私は佐藤眞先生らに師事して東京藝術大学音楽学部作曲科を卒業しました。現在はJCAA(日本作曲家協会)に所属、洗足学園音楽大学で教えるかたわら、編曲家としての活動が多く、日本の主要プロオーケストラのために100曲以上

のスコアを書いています。今回のご依頼も、クラシック関係の大手音楽事務所を通じてでした。

——委嘱を受けた瞬間の率直な思いは？

三味線の入っている管弦楽曲を全く知らず、どういう資料が残っているのかもわからない状態。現存するSP盤も今の録音技術に比べれば貧弱な音質です。おそらく三味線の独奏を際立たせるため小ぶりに配置したのでしょうか。作曲家の鈴木静一さん(1901-1980)が編曲したオーケストラ部分本来の編成もわかりません。町田さんは少年時代から邦楽をたしなんだそうですが、西洋音楽はどこでどうやって学ばれたのでしょうか？とにかく不明な点が多く、困惑しました。

——最初に音源を聴いて、どのような印象を持たれましたか？

全体の形式は、西洋の協奏曲の伝統を踏襲。3楽章構成で第1楽章がメイン、次にゆつくりとした楽章、最後はロンドも交えた活気ある楽章でソロとオーケストラの対比も鮮やかです。和洋折衷の典型ですが、今の私の耳で聴いても違和感はありません。私の学生時代、邦楽器奏者の皆さんはすでに洋楽の五線譜を読みこなしたポップスのコンサートにも出演、クロスオーバーは普通でした。でも『三味線協奏曲第1番』が作曲された20世紀前半は、邦楽の伝統も型も現在より強固に守られていたはずですから、受け入れられなかったのかもしれない。私たちが音楽学生だつ



杵屋勝十郎

©ヒダキトモ

©ヒダキトモ

た時期、20世紀前半の楽曲と接する際に感じた『日本人が洋楽を学び、作曲する意味』への葛藤も存在したのではないのでしょうか？

—— 1927年は昭和初期で戦争が激しくなる前ですから、大正デモクラシーの余韻もあって異文化交流は意外なほど盛んだったように思います。町田さんも日本の舞踊家からモダンダンスに触発された新作の相談を受けたり、この『第1番』を同時期に演奏した四世杵屋佐吉（1884-1945）さんもヨーロッパに派遣されてロンドンでクライスラーのヴァイオリンに感激、パリではラヴェルと交歓演奏に臨んだりした記録が残っています。

そうですね！もつと自由な雰囲気の中で西洋と東洋の両者が接点を探り、新たな出会いを楽しんでいたのだとしたら、『三味線協奏曲』を見る目も変わってきますね。

—— 復元作業は具体的に、どう進めるのですか？

当日の紀尾井ホール室内管弦楽団のサイズは廣瀬作品が最大、50人編成です。基本は復元なので、とにかく遺された音源から出発してある程度、三味線とオーケストラが渡り合えるように、コンサート用の工夫を施していきます。以前に「ベン・ハー」「スパルタカス」といった往年の映画音楽のスコアを整える作業を手がけた際、映画館で細かなところまで聴こえなくて

も、実際には後期ロマン派音楽の流れをくみ、リヒャルト・シュトラウス並みの精緻な作曲が施されていたのではないかと思うことがありました。これに対し町田&鈴木木の作曲アイデアにはポリフォニー（多声音楽）複数の独立した声部を持つ）や対位法の要素があまりなく、オーケストラの部分も三味線の語法に寄り添って、1本の太い旋律の流れを感じます。私はあくまでこの流れを生かし、多少の色づけを施していくこととなります。

—— お話をうかがっていて何か、ご自身の作曲にも一脈通じる共感を復元作業に抱いていらっしゃるように感じました。

作曲家になった時点でクラシック音楽の流れをくむ現代音楽はコンセプチュアルになり過ぎ、20世紀初頭のロマン派音楽のように一般の人々がすぐわかるメロディーの要素が後退していました。作曲の条件に全く制約がない場合、私は1本の旋律に基づくヘテロフォニー（モノフォニー）単一声部を複雑化させたもの的なものをとり入れることが多く、日本的な要素も意識してきました。機能と声理論も踏まえつつメロディーとハーモニーが持続する時間の中に、1本の強い旋律が流れる音楽を学生時代から志向してきましたので、『三味線協奏曲』への基本的な共感には強いといえます。

—— ありがとうございます。

取材文／池田卓夫  
（音楽ジャーナリスト@いけたく本舗）

独奏の杵屋勝十郎さんよりメッセージ

昨夏、本公演へのお声がけを頂戴した際に「三味線協奏曲第1番」と曲名を聞いただけで心拍数が上がってしまいました。普段の私には馴染みのない響きでしたが、紀尾井ホールでオーケストラの方々と共演できるなど、夢のような光栄なお話だと思いました。どんな曲かと音源を聴きましたら、何とも言えぬ懐かしい響き。まるで昔の時代劇の世界に入り込んだような気持ちになりましたが、作曲が町田先生と知り、急に親近感も得ました。世代的にはもちろんお目にかかったことはありませんが、民謡畑で生まれ育った私にとって町田先生は「ちゃっきり節」の作曲や近世日本民謡研究の大功労者として存じ上げていましたので、気が付けば「三味線協奏曲第1番」は新しい出会いとともに大切な曲になっていました。聴いてくださる皆さまの心に残るよう、全力で、丁寧に、大らかに楽しい演奏を目指したいと思っています。



きねやかつじゅうろう  
杵屋勝十郎（三味線）

1978年千葉県生まれ。幼少期より両親を通じ三味線音楽に親しみ、民謡、津軽三味線を習得、2009年に仁太坊賞受賞。杵屋勝幸恵に師事し、東京藝術大学を卒業後、現在は杵屋会会員として演奏活動を行っている。

響き合う和と洋

和楽器と紀尾井ホール室内管弦楽団  
近現代ニッポン音楽の歩みを聴く

【演目】  
町田嘉章「三味線協奏曲第1番」  
三味線 杵屋勝十郎

5/8  
木  
18:30

宮城道雄「越天楽交奏曲〜箏と管弦楽の協奏曲」  
箏 安藤政輝

廣瀬量平「尺八とオーケストラのための協奏曲」  
尺八 野村峰山

ほか

# ウィーン生まれの ゲッツェルが繰り出す 隠れた名作の 聴きどころ満載の音楽

紀尾井ホール室内管弦楽団(KCO)

の2025年度の定期演奏会の幕開けの指揮者はサッシャ・ゲッツェルです。ゲッツェルはこれまでも2015年と2017年にKCOの定期演奏会を振っており、2020年にも再々登場の予定でした。結局その時はコロナ流行のため中止となってしまいましたが、このように間を開けずに定期に招かれていたところに、彼がいかにKCOから信頼されているかが窺えます。今回は8年ぶりの待望の再会になります。

ゲッツェルはウィーン生まれ、若いころにはウィーン国立歌劇場管弦楽団のヴァイオリン奏者も務めており、音楽家としての彼の根底にはウィーンの伝統があるといつてよいでしょう。しかし決して彼は古い伝統に寄りかかっている指揮者ではありません。フィンランドの教師ヨルマ・パヌラに師事し、さらにアメリカのタンゲルウッド音楽祭に招かれて小澤征爾に指導を受けたほか、ムーティ、メータ、プレヴィンに薫陶を受けるなど、修業時代か

身上としています。

その彼が今回の公演で最初に振るハイドンの交響曲第39番は不安な切迫感と激情が脈打つ短調作品です。多数あるハイドンの交響曲の中で、敢えてこのマイナーな作品を選んだところにゲッツェルの意欲的な姿勢が見てとれます。演奏されることは稀ながらも実は隠れた名作であり、その素晴らしさを味わえる貴重なひとときとなるでしょう。

次に演奏されるのもなかなか聴く機会が少ないツェムリンスキーの《シンフォニエッタ》。ウィーン生まれで、後期ロマン的な作風で知られるツェムリンスキーですが、後期の1934年に書かれたこの作品は、新古典的なスタイルのうちにも、ナチが台頭してきた当時の不安な時代の空気を映し出した作品です。同じウィーン出身の音楽家として、ゲッツェルがこの作品に秘められた当時のツェムリンスキーの思いをどう表現するのか、興味がそそられます。

それに続くのは、ツェムリンスキーと深い繋がりがあつた新ウィーン楽派の作曲

らさまざまな師に出会って幅広い表現を身に付けた彼は、国際的な現代感覚を持ち合わせた指揮者で、近年の演奏の潮流も視野に入れながら、そうした今日的な感性をよき伝統と溶け合わせてフレキシブルな音楽を生み出すことを



サッシャ・ゲッツェル

家の中でもっともロマン的な傾向の強かったベルクの《7つの初期の歌》で、初期の作だけに特にロマンティシズムが濃厚な作品です。独唱を務めるのはスヴェトリナ・ストヤノヴァ。ブルガリアのソフィア出身、今はウィーン国立歌劇場をはじめとして国際的に活躍する名メゾソプラノ歌手で、官能性や叙情性や夢幻性など、この歌曲集の芳潤な世界を浮かび上がらせてくれることでしょう。オーケストラにも濃やかな表現が求められる作品で、ストヤノヴァとゲッツェル&KCOの



スヴェトリナ・ストヤノヴァ

絡み合いが聴きものです。

最後を飾るメイン曲は劇的かつ幻想的なシューマンの交響曲第4番。前回のKCOとの共演において同じシューマンの第2番でロマン性と清新さを併せ持つ名演を聴かせたゲッツェルだけにおおいに期待できるでしょう。今回彼が取り上げるのは、後年シューマン自身が手を入れた改訂稿でなく、1841年の初稿です。厚みある改訂稿に比べ、この初稿はよりすっきりとした書法となっており、KCOのような室内オケには初稿のほうがはるかに似合っています。ゲッツェルはこの初稿の持つ魅力を存分に引き出してくれるに違いありません。

まさに聴きどころ満載のプログラムであり、ウィーンの生んだ名匠のタクトが繰り出す音楽を堪能したいものです。

文/寺西基之(音楽評論家)

8年振りにゲッツェルが共演  
紀尾井ホール室内管弦楽団  
第142回 定期演奏会

4/18  
金  
19:00

4/19  
土  
14:00

【出演】  
サッシャ・ゲッツェル(指揮)  
スヴェトリナ・ストヤノヴァ(メゾソプラ)

【曲目】  
ハイドン : 交響曲第39番ト短調 Hob. I:39  
ツェムリンスキー : シンフォニエッタ op.23  
ベルク : 7つの初期の歌  
シューマン : 交響曲第4番ニ短調 op.120[1841年初稿]

## 新しい音の

## 世界を探求し

## 進化を続ける邦楽

地球の音楽映像ライブラリー「L.I.S.T.E.N.」で、世界を巡り音楽文化を追いかけてきた山口智子さんと、音楽学者の徳丸吉彦さんが邦楽の魅力について語り合うシリーズもいよいよ最終回。邦楽との出会いに始まり、邦楽の「声」「楽器」「伝承方法」と話題を展開してきたお二人が最後にテーマにしたのは「常に進化を続ける邦楽」についてです。

**徳丸** 4回にわたり、邦楽の魅力についてさまざまな面から対談してきましたね。

**山口** 私はテレビの歌謡曲で育ちましたが、世界を旅して異国の音楽を初めて耳にする時、無性に「懐かしさ」を感じることはありません。その音のルーツを辿ってみると、西洋と東洋が深く関わってきた歴史が見えてきて、人間が遙かな旅をして旺盛に行き交ってきた証しが「音」に潜んでいることに感動します。思えば日本の歌謡曲にも、世界のエッセンスがたくさん詰まっていたのだと気づきました。まさに邦楽には、世界が詰まっていると思います。

**徳丸** そうですね。日本音楽のアイデアも中国や朝鮮半島、西洋音楽などと影響

し合っていますからね。

**山口** 音は、壁も国境も超えて果敢に進み、互いに融合しながら美を生み出し続けてきた。さまざまな風土に育まれて、生まれ変わりながら、大切な心を次の世代に伝えてきた音楽はまさに生きる力ですよね。

**徳丸** 例えば、邦楽作曲家の宮城道雄は、昭和のはじめに雅楽の《越天楽》の旋律を使って、箏とオーケストラによるコンチェルトの形で《越天楽変奏曲》を作りました。まさに和洋混交です。その後、箏や三味線、尺八の演奏者が作曲家に曲を委嘱しましたので、現代音楽も盛んに演奏されるようになりました。

**山口** 遙かな距離を超え、時間の隔たりをも超えるものが音楽ですよね。遠い異国が無性に懐かしく、太古の時代に未来的で新鮮なときめきを感じることができる。

**徳丸** その後も、邦楽の演奏家は、異文化の楽器を積極的に取り入れて、新しい音の世界を探索しています。紀尾井ホールでも、箏と尺八でよく演奏される《千鳥の曲》を箏とヴァイオリンの組み合わせで紹介しました。また、箏とヴィオラのための《風彩》(米川敏子作曲)も演奏されています。

**山口** 日本の精神は「和」ですね。海外の民族音楽フェスティバルなどに行くと、日本から参加している音楽が非常に限られていて、もっと多彩な邦楽の魅力を世界に発信できないものかと思っています。

**徳丸** 日本の伝統音楽に関して、それが生まれたときからずっと変わらないと考えるのが、よく見られる誤解です。

**山口** 博物館のショーケースに保存された「伝統」ではなくて、日本の毎日の暮らし

の中に生きている音楽に、私たち自身ももっと意識を向けていきたいですね。

**徳丸** そうなんです。最古の音楽とされる声明や雅楽にも、新しい音楽が生まれ、それは、20世紀・21世紀でも続いています。日本の伝統というのは、変わることが前提なのです。

**山口** 江戸小紋の職人さんを取材したとき、「伝統は革新の連続である」という名言に感動しました。私たちの細胞が日々生まれ変わるように、新たな変化に挑みながら生まれ変わり続ける。日本の「和」の精神で世界を広く受け止め、日本ならではの風土を生かして、唯一無二の美に変化させ続けてゆく。それが伝統ですよね。

**徳丸** 日本語の「伝統」という言葉には、「過去」だけでなく、「今」と「未来」が関係しているのです。その見方から邦楽を捉えると、もっと面白くなると思います。

**山口** 初めて雅楽を聴いたとき、未来的

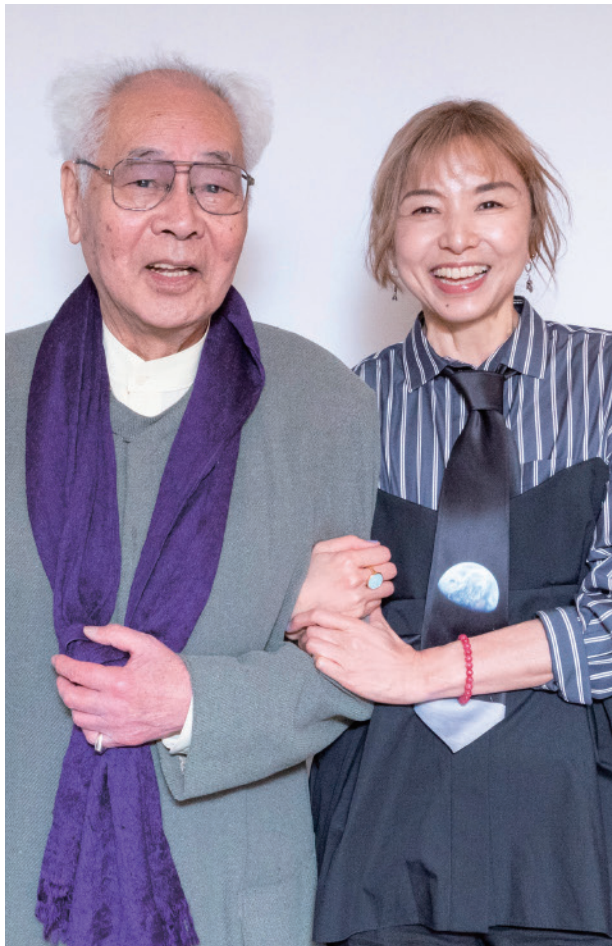
な響きに「宇宙の音楽」を感じました。遙かな古と超未来が渾然一体となっている神秘。古代こそ実は最先端であると私は思っています。

**徳丸** おっしゃる通りです。日本の伝統は、停滞しているのではなく、変化し続けています。伝統を守りながら変化する邦楽の面白さを、気軽に楽しんでいただけたらと思います。

**山口** 生まれ変わり続ける邦楽が楽しみです！

**徳丸** 5回にわたり対談をしていただき、ありがとうございました。

文／芹澤一美(音楽ライター)



対談の様子はYouTubeで  
ご覧いただけます。



協力：ザ・キャピトルホテル 東急

撮影：堀田力丸

# アルバン・ベルクを めぐると 3つの話



1930年ごろのアルバン・ベルク

20世紀のウィーンで活躍したアルバン・ベルク(1885〜1935)は、アルノルト・シェーンベルク(1874〜1951)、アントン・ウェーベルン(1883〜1945)とともに、新ウィーン楽派の作曲家として知られています。楽派とまとめられていますが、彼らの個性と音楽はさまざま。独学で作曲を学び、類いまれな才能と才覚で時代を切り開いたシェーンベルク、弟子のウェーベルンは奥ゆかしく、理論的なウィーン大学を卒業したエリート、もうひとりの弟子ベルクは、裕福な商人の家庭に生まれた早熟な文学青年でした。

## 1 破天荒な青年の あふれる才能

1900年、ベルクは、独学で歌曲の作曲を始めます。しかし10代後半の彼の私生活は大波乱。垢抜けた長身の美青年だったベルクは、家で働いていた娘との間に非嫡子をもうけ、学校は落第、別の女性との恋愛事件の末に自殺を図るなど、相当なもの。それでも1904年からシェーンベルクに師事することになったのは、ベルク

が書いてきた歌曲を兄が本人に内緒で

シェーンベルクに見せたことがきっかけでした。その後も書き続け、初期の歌曲は70曲を数えます。《7つの初期の歌》は、1905年から08年に作曲されたピアノ伴奏付き歌曲(後にオーケストラ伴奏に編曲)が収められ、素朴な曲から、修行時代の成果ともいえるブラームスやヴォルフの作曲手法が反映されたものまで、世紀末ウィーンの香りが漂うテキストが全音階や増三和音を多用した響きのなかで夢見心地に歌われます。

## 2 4つの小品で試みた 極小形式

ベルクもシェーンベルクらと同様に、拡大された調性、極小形式、無調、12音技法と進んでいきます。手法や技法は同じでも、やはり響きに個性が表れます。ベルクの場合、たとえ表現主義的傾向や対位法的な手法を用いたとしても、そこには甘美な抒情性が溢れます。マーラーの音楽を熱烈に崇拜し、R.シュトラウスの《サロメ》の

オーストリア初演を皆で観に行つたとき、誰よりもその音楽に興奮したように、19世紀の市民社会に根差した教養主義的な音楽文化の中で育まれた感性は、ベルクの音楽の中に潜んでいます。極小形式を試みた無調の《4つの小品》(1913)でも、伝統を完全に振り切るまでには至らず、シェーンベルクに酷評されたのもそんなところに理由があるのかもしれない。

## 3 マノンに捧ぐ

文学に深く傾倒したベルクは、オペラをふたつ手がけました。どちらも20世紀を代表する名作です。ひとつは社会的弱者を題材にしたビュヒナーの戯曲による《ヴォツェック》。もうひとつ、魔性の女性ルルの誘惑と破壊を描いたヴェーデキント原作の《ルル》は、中断をはさみ第3幕は未完のまま残されました。なぜ作曲を中断したのか。それをしてまでも書かなければならない作品があつたからです。

ベルクのヴァイオリン協奏曲(1935)は、19歳の若さで亡くなったマノン(マーラーの妻アルマと再婚した建築家ヴァルター・グロピウスの娘)のために作曲されました。不協和音の厳しい響きや動機の執拗な反復などで鋭く切り込む一方で、12音技法の基本音列は、長三和音と短三和音を含むためベルクラしい調性感のある響きが生まれます。さらにこの曲では、

まるでオペラのように愛と死が暗示されます。ベルクの初恋の女性や晩年の恋人の存在をほのめかす仕掛けがあり、バッハのコーラルの引用はマノンの死を悼みます。もしかしら自身死をも予感していたのかもしれない。愛と情熱に生きたベルクの人生。それもまた、彼の音楽の本質を識る手がかりのひとつになるのです。

文／柴辻純子(音楽評論家)

### ベルク作品が聴ける3つの演奏会

4/18 (金) 19:00 4/19 (土) 14:00 紀尾井ホール室内管弦楽団 第142回 定期演奏会  
サッシャ・ゲッツェル(指揮)、スヴェトリーナ・ストヤノヴァ(メゾソプラノ)  
ベルク：7つの初期の歌 →P4でご紹介しています



5/16 (金) 19:00 三菱地所 presents 紀尾井 明日への扉 第44回 瀬千恵美(クラリネット)  
ベルク：4つの小品



11/21 (金) 19:00 11/22 (土) 14:00 紀尾井ホール室内管弦楽団 第145回 定期演奏会  
ダンカン・ウオード(指揮)、ヴィクトリア・ムローヴァ(ヴァイオリン)  
ベルク：ヴァイオリン協奏曲 [会場:東京オペラシティコンサートホール]



# 第35回 日本製鉄音楽賞 受賞者が決定しました

これからが期待される優れたアーティストに贈呈

フレッシュアーティスト賞 <sup>うえのみちあき</sup> 上野通明さん(チェロ)

ジュネーブ国際音楽コンクール優勝後、リサイタルやコンチェルト、室内楽など幅広く活躍。なかでも2024年5月に行われた邦人作曲家の無伴奏作品のみのリサイタルは作品に対する共感に満ち、彼自身の豊かな感性が溢れた名演で聴衆を感嘆させました。さらなる世界への活躍を期待されての受賞となりました。

音楽文化の発展に大きな貢献をされた個人に贈呈

特別賞 <sup>みやざわとしお</sup> 宮澤敏夫さん(富士山静岡交響楽団専務理事)

これまで様々な楽団の事務局長や専務理事を務めるなど、長年にわたって日本のオーケストラ界の発展に多大な貢献をなすとともに、日本演奏連盟事務局長や伊那文化会館館長などを歴任。さらに木曽音楽祭はじめ地方の音楽祭の運営にも関わるなど、日本の音楽界全体の振興に尽力してきた功績の大きさは計り知れないものがある、としてこれまでの功績に対し贈呈されました。

※2025年1月1日逝去。生前に受賞が決定しておりました。故人のご冥福をお祈り申し上げますとともに、謹んでお悔やみ申し上げます。



フレッシュアーティスト賞  
上野通明



特別賞  
宮澤敏夫

## 紀尾井ホール室内管弦楽団(KCO) 新メンバーのご紹介

2024年10月1日付で、紀尾井ホール室内管弦楽団に新しいメンバーを迎えました。

かねこあみ  
金子亜未(オーボエ)

### メンバーとしての意気込み

このたびはメンバーとなることができとても嬉しく思っております。これまでKCOに出演させていただいた際、なんて温かく愛に溢れた音がするのだろう!と感じることが幾度となくありました。この感動を忘れずに精進してまいりますのでどうぞよろしくお願いたします。

### オーボエ奏者になったきっかけ(楽器との出会い)

小学4年生のころ、学校にある管弦楽部でオーボエに出会いました。(個人練習の時間はなく)初めて演奏した曲はベートーヴェン交響曲第5番です! 高校生のとき「藝大目指してみたら?」とお言葉をいただき、そのころからオーケストラプレイヤーになりたいと考えていました。

### 好きな作曲家

バッハ、モーツァルト、ドヴォルザーク、マーラーなど

### 趣味

旅行、温泉、美味しいもの、ショッピング、たまにゴルフ、など

### 現在のマイブーム

おもてなしの心が素晴らしい、星野リゾートさんとりにの虜になっています。

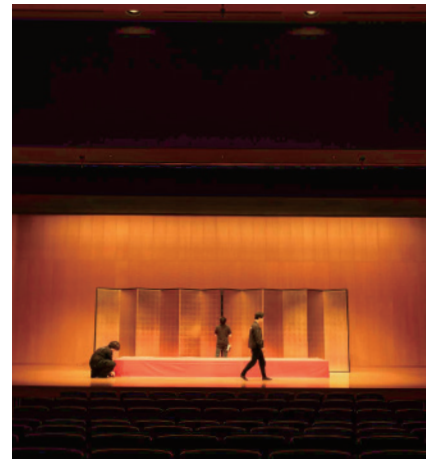


© Ayane Shindo

## 今号の表紙

## 邦楽の演奏会を支える職人技

邦楽用の小ホールで演奏する台や屏風を飾るのは、熟練の明治座舞台スタッフです。短い転換時間で、大きな屏風を左右均等に広げ、山台を飾る5m以上ある毛氈をしわなく角を合わせてぴっと張る。まさに職人技です。



## 紀尾井ホールにご支援いただいている企業および個人の方々です

### 紀尾井サポートシステム会員 (五十音順・株式会社等表記及び敬称略)

《特別協賛会員》住友商事/日鉄ソリューションズ/三井不動産/三井物産/三菱商事/三菱地所  
 《みやび会員》伊藤忠商事/大島造船所/大林組/鹿島建設/商船三井/菅原/住友商事/Dr.かすみ永田町クリニック/日本郵船/丸紅/三井住友銀行/三井住友信託銀行/三井不動産/三井物産/三菱商事/三菱地所/メタルワンほか匿名2社  
 《ひびき会員》オカムラ/高砂熱学工業/竹中工務店/東京きらぼしフィナンシャルグループ/みずほ証券/山下設計  
 《みどり会員》青鬼運送/赤坂維新號/今治造船/ヴォートル/エーケーディ/荏原冷熱システム/ザ・キャピトルホテル 東急/三協/清水建設/上智大学/西武リアルティソリューションズ/大成建設/千代田商事/テイスト・ライフ/東芝ライテック/永田音響設計/ニュー・オーターニ/ハウス食品グループ本社/パナソニック/三菱UFJ銀行/三菱UFJ信託銀行/三菱UFJモルガン・スタンレー証券/ミュージジョン/明治座舞台/ヤマハサウンドシステム/ワークショップ21  
 《あおい会員》青木陽介/浅沼雄二/浅見 恵/石崎智代/磯部治生/伊藤真理子/上野真志/馬屋原貴行/大内裕子/大垣尚司/大久保なほ子/太田清史/大花謙一/小川 保/小倉 ヒロ・ミハエル/糟谷敏秀/片山國正/片山能輔/加藤巻恵/加藤優一/金井俊樹/神川典久/川口祥代/川島知恵/菊池恒雄/木谷 昭/楠野貞夫/栗山信子/河野紗妃/小坂部恵子/斎藤公善/坂詰貴司/坂根和子/佐久間庸行/佐野千紘/佐伯いく子/潮崎通康/柴田雅美/清水 正/清水多美子/清水康子/白土英明/新角卓也/鈴木順一/鈴木 幸/鈴木 亮/高下謹吾/高杉哲夫/田中 進/陳 艶君/田頭亜里/戸田純也/中尾武彦/中塚一雄/中西達郎/中野洋子/中村健司/中村昌子/中山昌樹/原田清朗/藤村行俊/冬木寛義/北條哲也/堀川将史/牧本恵美子/松枝 力/松尾芳樹/真野美千代/丸井正樹/水口美輝/簗輪永世/宮島正次/宮田宜子/宮武悦子/宮原 薫/宮本信幸/ミュージ M/村上喜代次/村上敏子/持留宗一郎/茂手木優輝/八木一夫/八木晶子/矢田部靖子/山内寿美/山口 彰/山口 聡/横手 聡/吉田季光/吉見 亨/渡邊一夫  
 ほか匿名44名 計247口

(2025年2月1日現在)

### 特別支援会員 (五十音順・株式会社等表記略)

アステック入江/五十鈴/NSユナイテッド海運/NSユナイテッド内航海運/エヌエスリース/エヌテック/王子製鉄/大阪製鐵/九築工業/草野産業/黒崎播磨/合同製鐵/鴻池運輸/小松シヤリング/山九/産業振興/三見金属工業/サンユウ/三洋海運/山陽特殊製鐵/ジオスター/新日本電工/スガテック/大同特殊鋼/大和製鐵/高砂鐵工/高田工業所/鶴見鋼管/DNPエリオ/テツゲン/電機資材/東海鋼材工業/東邦シートフレーム/トピー工業/日亜鋼業/日鉄SGワイヤ/日鉄エンジニアリング/日鉄片倉鋼管/日鉄環境/日鉄ケミカル&マテリアル/日鉄建材/日鉄鋼管/日鉄鋳業/日鉄工材/日鉄鋼板/日鉄興和不動産/日鉄スチール/日鉄ステンレス/日鉄ステンレス鋼管/日鉄精圧品/日鉄精密加工/日鉄ソリューションズ/日鉄テクノロジー/日鉄テックスエンジニア/日鉄ドラム/日鉄物産/日鉄物流/日鉄プロセッシング/日鉄保険サービス/日鉄ボルテン/日鉄溶接工業/日鉄レールウェイテクノス/日本金属/日本触媒/濱田重工/富士鉄鋼センター/不動テトラ/北海鋼機/幕張テクノガーデン/三島光産/宮崎精鋼/吉川工業/ワコースチール  
 日本製鉄 (2025年2月1日現在)

フォトレポート

11.28(木) 紀尾井たっぷり名曲8  
長唄「春興鏡獅子」杵屋勝四郎×杵屋栄八郎



アンケートより

唄、三味線、囃子が三位一体となった素晴らしい演奏でした。演奏前の曲の背景説明も初心者には嬉しい構成だと思っています。今回の出演者の組み合わせで他の曲も聴いてみたいと思いました。

© ヒダキトモコ

12.6(金) 紀尾井レジデント・シリーズ III  
青木尚佳(第2回)“Fantasy”



アンケートより

ファンタジーというテーマであり聞き取りにくい曲、プログラム構成、盛りだくさんで楽しませていただきました。ハーブとの共演も素敵でした。いつものように余裕で完璧かつ美しい音色で素晴らしい。

© 達坂聡

12.12(木) 三菱地所 presents 協賛：三菱地所株式会社  
紀尾井 明日への扉 第41回 井上玲(リコーダー)

アンケートより

とても聞き応えがあって面白かった。音が滑らかにつながって装飾音が唐草模様みたいで美しかった。コレリのヴァイオリン・ソナタはよく聞くので、リコーダーで表現できるとは驚いた。



© 堀田力丸

12.18(水) 音楽でつづる文学8  
源氏物語 一浮舟一

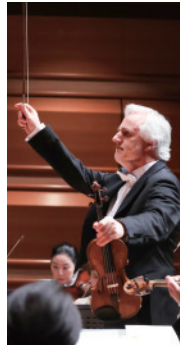


源氏物語に登場する最後のヒロイン、浮舟を題材に作曲された箏組歌、地歌、能を上演しました。前半の、浮舟の物語についてスライドを使った分かりやすい解説も好評でした。



© 堀田力丸

1.17(金)・18(土)・19(日) 協賛：日鉄ソリューションズ株式会社  
日鉄ソリューションズ プレゼンツ  
KCO名曲スペシャル ニューイヤー・コンサート 2025  
紀尾井ホール室内管弦楽団 特別演奏会



ウィーン・フィル・コンサートマスターのライナー・ホーネックのヴァイオリンソロをたっぷり聴いていただいたあとは、ウィーンの香るワルツやポルカなど、楽しい演出で会場が笑顔に包まれる場面もあり、新春にぴったりの華やかなステージとなりました。

© ヒダキトモコ

1.21(火) イル・ポモドーロ with フランチェスコ・コルティ



待望の初来日公演。チェンバロの魔術師と称されるコルティの变幻自在で魔法のような演奏に、イル・ポモドーロの洗練されたアンサンブル、前田リリ子さんの美しいフラウト・トラヴェルソと、バロック音楽の魅力を余すところなく堪能する一夜でした。

© ヒダキトモコ

次号からデザインを一新 / 紀尾井だより5/6月号(171号)より、デザインを新たに、サイズがコンパクトになります。そして邦楽の新しい連載がスタート。リニューアルする「紀尾井だより」をどうぞお楽しみに。

主催公演チケットのお申込み  
紀尾井ホールウェブチケット <https://kioihall.jp/tickets>

そのほかチケットぴあ、イープラス(クラシック公演のみ)  
CNプレイガイド(電話予約:0570-08-9999/10:00~18:00年中無休)  
でもチケットを取り扱っています。

日本製鉄 紀尾井ホール

公益財団法人 日本製鉄文化財団 公演の最新情報などはこちら  
〒102-0094 東京都千代田区紀尾井町6番5号  
TEL.03-5276-4500(代表) FAX.03-5276-4527 <https://kioihall.jp>

